

柿本人麻呂の献呈挽歌：長反歌形式の一考察

著者	菊地 義裕
著者別名	KIKUCHI Yoshihiro
雑誌名	文学論藻
巻	88
ページ	1-26
発行年	2014-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012936/

柿本人麻呂の献呈挽歌―長反歌形式の一考察―

菊 地 義 裕

序

柿本人麻呂の挽歌のひとつに『万葉集』卷二所収の献呈挽歌がある。題詞に「柿本朝臣人麻呂、泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献る歌」と記された長反歌二首から成る作品である。泊瀬部皇女・忍坂部皇子は天武天皇と穴人大麻呂の娘擬媛娘とのあいだに誕生した同母の兄妹（あるいは姉弟）である（「天武紀」二年条）。題詞は兄妹への献呈の事実を伝えるだけだが、左注には「或本」の伝えとして、「川島皇子を越智野に葬る時、泊瀬部皇女に献る歌なり」とあり、持統五年（六九一）九月に三十五歳（「懷風藻」）で薨じた川島皇子を越智野に葬った時、泊瀬部皇女に献呈された歌であることが記される。左注から

泊瀬部皇女は川島皇子の妃であつたと推測され、当該歌は川島皇子の葬儀の折、妃の泊瀬部およびその血縁の忍坂部に献られたものと考えられる。

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下
つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り な
びかひし 婦の命の たたなづく 柔肌すらを 剣
太刀 身に副へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るら
む 一に云ふ、荒れなむ そこ故に 慰めかねて けだ
しくも 逢ふやと思ひて 一に云ふ、君も逢ふやと 玉垂
の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣
は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故

反歌

しきたへの袖交へし君 玉垂の越智野過ぎゆく またも

逢はめやも 一に云ふ、越智野に過ぎぬ (一九五)

長歌では亡き夫君川島との出会いを求めて越智野にさすらい、旅寝する泊瀬部の姿が描かれる。全体は二八句から成り、文脈に即して「夜床も荒るらむ」を区切り目として、前後二段に分けられる。人麻呂作歌のなかでは比較的短い小長歌であるが、文脈・内容の把握にかかわって問題となる箇所が散見し、いまだ議論が定まったとはいえない状況にある。とりわけ長歌前段の文脈、およびそれを受けた「そこ故に」以下とのつながりに議論が集中し、それらをどう解するかによって長歌全体の理解が変わることになる。また人麻呂の作歌とはいえ、文脈の理解にかかわって、人麻呂の立場での作なのか、他者の立場での作なのか、作中主体をどうみるかという問題もあり、さまざまな理解が提示されている（本稿では作中主体の用語を使用する）。一方反歌では、越智野から去りゆく川島の姿をとらえつつ、泊瀬部が夫君と二度と逢えないことがうたわれる。この反歌についても、一首の感慨が泊瀬部

自身のものなのか、第三者からのうたいかけによるものなのか、長歌同様作中主体の問題が潜在する。

本稿では長反歌形式の考察の一環として、当該の長反歌の内実を問題とし、その作品的特色を検討する。またその検討を通して『万葉集』における長反歌の関係について考察する。

一、長歌前段の表現と文脈

はじめに長歌で問題となる箇所に検討を加え、長歌の特色および主題とするところを明らかにしたい。

前半部で根本的に問題となるのは、先行研究が一樣に触れるように、「孀の命の」の解釈、また「身に副へ寝ねば」を誰の行為とみるか、その主体の理解である。「孀の命の」は配偶者であるツマを尊んだ表現であるから、夫である川島とも妻である泊瀬部とも解される余地がある。「の」についても連体格、主格双方の可能性がある。また、その理解に伴って「柔肌」が誰のそれかも定まることになる。

従来の解釈を稲岡耕二^{〔注〕}の整理によって示すと、

a 孀の命（川島皇子）の柔肌を（泊瀬部皇女が）身に副

えて寝ないので

b 嬌の命（泊瀬部皇女）の柔肌を（川島皇子が）身に副えて寝ないので

c 嬌の命（川島皇子）が、（泊瀬部皇女の）柔肌を身に副えて寝ないので

の三つの類型となる。

「嬌の命」を川島・泊瀬部どちらとみるにせよ、まず注意されるのは、冒頭以下「なびかひし」までの修飾部分である。この箇所では、明日香川の玉藻がその流れのなかでなびき触れ合うさまを序として「玉藻なす」が起こされ、その玉藻のように「か寄りかく寄り」なびき合った存在として「嬌の命」が提示される。このように玉藻の修辭を通して睦まじくなびき合った夫婦の姿態を描出することは、周知のように人麻呂の得意とするところであり、石見相聞歌にも「玉藻なす寄り寝し妹を」（2・131）、「玉藻なすなびき寝し児を」（135）、「玉藻なすなびき我が寝し しまたへの妹が手本を」（138）と、共寝した妻の描出に用いられる。また、明日香皇女挽歌でも「我が大王の 立たせば玉藻のまころ 臥やせば川藻の

ごとく なびかひし宜しき君が」（2・196）と、明日香皇女が夫君と生前睦まじく過ごした、そのようすの描出に用いられている。こうした同じ人麻呂作歌の例を踏まえると、玉藻のなびきを女性の姿態の比喩とみ、「柔肌」の表現とも相俟って「嬌の命」を泊瀬部と解するbには無理がない。

ただし、この理解は武田祐吉（『万葉集全註釈』・西郷信綱（『万葉私記』）に端を発してのもので、江戸期以来aが一般的で、岩波古典文学大系や大野保^{（注2）}によつてcも提示されて現在に至っている。もつとも、cも「柔肌」は泊瀬部の肌と解し、「身に副へ寝ねば」の主体を川島とみる点ではbと同じである。

「嬌の命」を川島とみる場合、bの判断のよりどころとなる「玉藻」の修辭については、たとえばcを指示する阪下圭八が「相愛の姿態を彷彿する映像」で「夫、妻それぞれに有効にはたらきうる^{（注3）}」と解するように、その「非限定的性格」をよりどころに、それぞれの観点から長歌の文脈を踏まえて判断されることが多い。したがって冒頭部の比喩のみではいずれとも決めがたい面もある。

客観的な根拠が求められるが、稲岡耕二は人麻呂歌集のツ

マの表記「嬬」「孀」について、その性別が「君」「子ら」「妹」など、一首にともに含まれる語によって明らかにされることを指摘し、人麻呂の挽歌においても、「孀」の表記をもつ明日香皇女挽歌、吉備津采女挽歌においては、死者の配偶者に「孀」の文字が当てられ、死者は「王」（2・一九六）、「子等・妹」（二二七）の語で区別されていることから、当該歌の「孀の命」は長歌後段で「君」と呼称される川島とは異なり、泊瀬部とみるべきことを指摘する。

また「身に副へ寝ねば」の「身に副ふ」の用例は、ほかに四例（2・二二七、11・二六三七、二六八三、14・三四八五）あり、それらが「男」を主体とする表現であることが伊藤博によって指摘されている。集中には「身に佩き副ふ」、^{（注4）}「身に取り副ふ」も各一例（11・二六三五、4・六〇四）あり、このうち「身に取り副ふ」の例は女性にかかわり、笠女郎が大伴家持に贈った一首中に見えるものである。

剣太刀身に取り副ふと夢に見つ 何の兆^{きざ}そも 君に逢はむため
（4・六〇四）

一首は、当時の俗信にかかわって、女郎が「剣太刀」を「身

に取り副ふ」と夢に見たことについて何の前兆かと自問し、「君に逢はむため」と自答した内容である。唯一女性にかかわる例であるが、これとても、宮田持江が「自分が、「劔刀」を身につけた様を見て疑うのは、それが常ではないからであろう」と言うように、「劔太刀」が男性が身に帯びるものであったことを前提としての俗信、また表現と解される。当該歌の「身に副ふ」も男性の行為と理解される。なお、宮田は当該箇所（孀の命のたたなづく柔肌すらを劔太刀身に副へ寝ねば）の構文「一のーをーば」に触れて、集中の同様の構文において「の」が「ーば」という述部の主語を表す働きをしている用例はなく、「の」は連体格とみるべきことを指摘している。こうした先行研究の成果を合わせ見ると、三つの類型のなかではbが穏当な理解と思われる。

また、bの理解を示した武田・西郷は、「夜床も荒るらむ」の「夜床」について、「薨去した皇子の柩中の寝床」（武田『全註釈』）、「越智野に葬られた夫の夜床のさま」（西郷『私記』）と解した。泊瀬部皇女が夫君を求めて越智野へと赴き旅寝するさまを述べる後段との脈絡を踏まえてのものであるが、伊

藤博が一首に家と旅の対比構造をみ、越智野の旅寝に対して家の「夜床」があると解したように、「夜床」は夫婦の共寝した床とみるべきであろう。泊瀬部の「柔肌」を川島が身に副えて寝ることがないので二人の床は荒涼としているだろうというのである。「荒る」状態とは、大伴旅人の亡妻挽歌の一首、都なる荒れたる家にひとり寝ば 旅にまさりて苦しかるべし

(3・四四〇)

が端的に示すように、いるべき人がそこにはない状態である。^(注6)「夜床も荒るらむ」は皇子の不在、またそれによる泊瀬部の孤閨のさまをうたったものであり、後段への展開では、それゆえに泊瀬部は夫君の面影を求めて越智野へと探し出ることになる。

前段の文脈を本稿は以上のように解するが、一連の叙述が誰の立場でなされているのか、その点が長歌全体の理解にかかわることとして問題を含んでいる。もともと、この点も文脈の把握にかかわって先の諸説のいずれと解するかによって変わることになり、一様ではない。人麻呂の第三者的立場での叙述とするのが諸注も含めて広く見られる理解であるが、

橋本達雄は皇子・皇女に関する作であるにもかかわらず敬語が使用されていないこと、また題詞に「忍坂部皇子」の名が記されることに注目して、前段は忍坂部の立場から川島にうたいかけたもの、後段は泊瀬部の立場から川島にうたいかけたものとする。^(注7)また身崎壽は前後半で作中主体が変わる例が人麻呂作歌になく、橋本が類例としてあげる作品が当該歌には当てはまらない巻十三の問答歌(三二九五・三三〇九)であることなどから、作中主体の変化を否定し、夫婦の機微に触れ得る人物として橋本が注目した忍坂部を挙げ、長反歌は「忍坂部から泊瀬部に呼びかける二人称形式でうたわれている」とする。^(注8)

橋本論・身崎論とも前段についてはbの理解に立っている。同じ理解に立つ本稿としても注目されるところだが、a・cによって文脈をとらえる論に目を向ければ、その理解はさらに拡大し多様なことになる。

たとえば、橋本同様、前段と後段で作中主体を異にするという見解をとる曾田友紀子は、aの理解に立って、前段は忍坂部が泊瀬部に慰めの気持ちを含めて呼びかけたもの、後段

は泊瀬部が忍坂部に自らの嘆きを訴え答えたもので、唱和の形式を成すとする。^(注1) また、そうした形式をもつ例として、卷十三相聞部の三二七六、三二七八の長歌を挙げる。しかし両歌を見ると、掲出は控えるが、三二七六は前半が女のもとから別れてきた男の嘆きを、後半は男の訪れを待つ女の嘆きを内容とする。また三二七八は、前半が妻のことが心にかかって仕方がないという男の思いを、後半が男の訪れをひたすら待つ女の思いを内容とする。内容的に男女の感慨は個々に完結し、「慰め」に対して「嘆き」の訴えをもつて応じるような関係にはない。また必ずしも男から女へ、女から男へといった応酬性があるようにも見えない。「呼びかけ」に対して「答え」という場合、それは橋本が例証として挙げた問答歌に近いように思うが、それらの歌の場合は前半の問いの部分に問いかけの疑問詞が添えられるから、その例にも当てはまらない。帰するところ、当該歌について前後半で作中主体を異にし、AからBへ、BからAへといった応酬性を想定する場合、例証に恵まれないということになるのではなからうか。なお先行研究にはほかに、前段・後段で作中主体が異なるとみ

る論が提示されている。^(注1) 個々に見解を異にするが、人麻呂作歌はもとより、集中においても適切な類例が見られないのに、一首の長歌をなぜそう読まなければならないのかという基本的な問題があるのではなからうか。^(注12)

また後段を橋本論、曾田論のように泊瀬部を作中主体と解すると、後段末部の「旅寝かもする」は泊瀬部自身の行為としてみずからの詠嘆と解することになる。しかし伊藤博・岡内弘子・身崎壽が検証するように、この「かも」は集中の用例に照らして疑問と解すべきであり、その点からも問題がある。

長歌は前後半で作中主体を異にすることなく、全体が第三者的な立場から詠まれたものとみてよいと思われる。ただし、身崎が言うように、前段は「夫婦の機微」^(注13)に触れた内容であり、臣下の人麻呂が無媒介にうたえる内容ではない。題詞をも踏まえれば、夫婦の身近にいてそれぞれをよく知る忍坂部の立場でうたわれたものとみるべきであろう。

ただし、身崎は長反歌を「忍坂部から泊瀬部に呼びかける二人称形式」の作とみる。これにしたがえば「孀の命」の語

も二人称で、「妻であるあなた」^(注15)と解することになる。集中においてツマノミコトの語は、後の例になるが、家持の歌に「妻の命」の意で二例（17・三九六二、18・四一〇一）見られる。これらはいずれも三人称である。ツマは配偶者の一方をいう語であるから、妻であれば夫に対してその存在をさしての称である。bにしたがえば「孀」は妻の意で泊瀬部をさし、あくまで川島にたい対する存在とし泊瀬部を位置づけての称ということになる。しかも「孀」を尊称の「命」の語を添えて高めてもいる。「妻の君である私」と解して一人称でとらえる土井清民の論もあるが、右の点で「孀の命」は一人称でも二人称でもなく三人称とみるべきであろう。

第三者として忍坂部を作中主体と想定すると、「孀の命」の尊称は、長歌において泊瀬部を川島にたい対する存在として遇した結果ということになる。橋本は前段について忍坂部が川島にうたいかけたものと解したが、長歌全体が川島に向かつてうたわれたもの^(注17)とみるべきである。一首が忍坂部の依頼によりその立場で制作され、泊瀬部に献呈されたものならば、献呈される泊瀬部に対して敬称が用いられることは当然考え

られるところでもある。一方川島については、後段で「君」の語で示される。泊瀬部を三人称とみると、川島については二人称とも三人称とも解せよう。二人称なら忍坂部の立場から川島にうたいかけたものとなり、三人称の場合は忍坂部が語り手となって語る形態となり、聞き手を意識したものとなる。双方の可能性があるが、前者の場合でもうたいかける内容に聞き手が耳を傾け、忍坂部の感慨を享受して悲しみをもにすることになる。

以上の検討を踏まえて前段の大意を示すと、次のようになる（括弧内には二人称・三人称の場合の双方を示した）。

〔前段〕明日香川の上流の瀬に生えている玉藻は、下流の瀬に向かつて流れ触れ合っている。その美しい藻のよ
うに、あちらへ寄りこちらへと寄ってなびき合った妻の
君の柔らかな肌を、（あなたが／皇子様が）身に添えて寝
ることがないから、二人の夜の床もむなしく荒れている
ことだろう。

二、長歌後段の表現と文脈

長歌後段は「そこ故に」から始まる。「そこ故に」は前段末尾の「夜床も荒るらむ」の推量と後段を結ぶはたらきを成している。「夜床も荒るらむ」は、前述したように二人の寢床が荒涼とすることであり、それは川島の不在による泊瀬部の独り寝を象徴する。「そこ故に」はこれを受けて、そのため、そうしたわけで、としてそれに伴う帰結の叙述を導く。後段においてその帰結にあたるのは、皇女の越智野での旅寝であり、「草枕旅寝かもする」の箇所である。「そのために皇女は旅寝をするのか」、これが示される帰結である。

この「旅寝」を当時の習俗としておさえれば、『万葉考』が、古へは新喪に墓屋作りて、一周の間人しても守らせ、あるじもをりをり行てやどり、或はそこに住人も有りし也と述べるように、越智野に設けられた殯宮なり墓所なりへの宿りということになる。そのようすは卷二の日並皇子の宮の舎人たちの働傷歌群に「侍宿（とりの）」（二七四・一七九）として表現されるところであり、明日香皇女挽歌にも殯宮に通う夫君の

ようすがうたわれる（一九六）。

もちろん後段では、泊瀬部の越智野に赴くようすが夫君を求めてさまようさまとして詩的に表現されているが、前段・後段の内容を実際のこととしておさえてみると、前段にうたわれたのは泊瀬部の独り寝、後段にうたわれたのは越智野の殯宮ないしは墓所での宿りで、双方が本来因果の関係にあるわけではないことがわかる。双方を因果の関係で結びつけているのは「そこ故に」である。また越智野での「旅寝」は、「そこ故に」で前段の「夜床も荒るらむ」と結びつけられただけでなく、後段では「慰めかねて」「けだしくも逢ふやと思ひて」とも結びつけられている。つまり、〈慰めかねて↓旅寝かもする〉、〈けだしくも逢ふやと思ひて↓旅寝かもする〉というように、後段のなかでも因果関係が形成されているのである。しかも注意されるのは、「慰めかねて」「けだしくも逢ふやと思ひて」は、作中主体を介してのことではあるが、それは同時に泊瀬部の心情でもあるということである。前段・後段の因果関係は、後段において泊瀬部の心情によって必然的なものとして裏付けられることになる。

長歌において当該箇所は次のごとくである。

そこ故に（X）慰めかねて（Y）けだしくも逢ふやと思

ひて（Z）玉垂の越智の大野の 朝露に玉裳はひづち

夕霧に衣は濡れて 草枕旅寝かもする 逢はぬ君故

右の文脈において、X・Yは泊瀬部の心情を、Zはそれに伴つての行動を表し、いずれも「旅寝かもする」にかかっている。X・Yの句の性格を明らかにするという意味で、X・Yを切り離して、それぞれについて個別に句の順序を入れ替えてみると、まずYについては次のようになる。

そこ故に 玉垂の越智の大野の 朝露に玉裳はひづち

夕霧に衣は濡れて けだしくも逢ふやと思ひて 草枕旅

寝かもする 逢はぬ君故

この場合、YとZとを入れ替えても、双方は並列の関係で、ともに「旅寝かもする」を修飾し、大きく意味が変わることはない。これによると、「けだしくも逢ふやと思ひて」は、皇女の行動に見合う、追慕の心情を示す表現として、独立して機能するものであることがわかる。

これに対して、Xの場合は、

そこ故に 玉垂の越智の大野の 朝露に玉裳はひづち

夕霧に衣は濡れて 慰めかねて 草枕旅寝かもする 逢

はぬ君故

となり、「慰めかねて」は「旅寝かもする」の理由とはなるものの、「玉垂の」以下のZとの関係が不透明となる。また、前段とのかかわりで見ると、二人の「夜床」が荒涼としている、そのために裳が濡れ、衣が濡れたということになって、「そこ故に」で関係づけられた前段と後段の内的連携が分断され、文脈は必然性のないものとなってしまう。これによると、X・Yはともに泊瀬部の心情を示すとはいえず、とりわけXの「慰めかねて」は、前段と後段をつなぐ「そこ故に」と分かちがたく結びついていることがわかる。

品田悦一が当該箇所について、

「……夜床も荒るらむ」で立ち止まったときには「第三者」の立場からの推量としか理解され得ないものが、「……夜床も荒るらむ、そこ故になぐさめ兼ねて……」と読み進めるやいなや、たちどころに様相を一変し、皇女の意識において同じ推量が成立しているかのような印象を与え

る——というよりもむしろ、そのような理解へと読み手を
半ば強制的に導く——のである。^(注18)

と述べるところが、この辺のありようを言い当てたものといえよう。

長歌において「そこ故に」は単なる接続のことばではない。前段・後段を因果の関係で結び、「夜床も荒るらむ」の推量からの必然として、皇女の「慰めかねて」の心情を導く役割を担っているのである。前段・後段は緊密であり、一連の叙述は作中主体の一貫した意識のもとになされているとみるべきである。一首は先に述べた類例の問題だけでなく、こうした構造の面からも、前段・後段が作中主体を異にして二分されることは考えがたい。

また「慰めかねて」の心情が「そこ故に」と分かちがたく結びついている事実は、長歌の中心が泊瀬部の川島への恋慕に据えられていることを端的に示している。「逢ふやと思ひて」の句が添えられるのもこの点にかかわってのことであり、作中主体は、皇女が朝露に裳を濡らし夕霧に衣を濡らして難渋しながら旅寝するのもそのためかと問うのである。

このように、後段は皇女の夫君追慕の文脈といつてよい。後段の大意を示せば、次のようになろう（括弧内は前段同様）。

〔後段〕そのために、（妻の君は）心を慰めかねて、もしかしたら（あなたに／皇子様に）逢えるかと思つて、越智の大野の朝露に美しい裳は濡れ、夕霧に衣は濡れて旅寝をするのか、逢えない（あなたなのに／皇子様なのに）。

括弧で示した「妻の君は」「あなたに／皇子様に」は、本文に明示されているわけではない。示されないのは、詠じられる追慕の思いと行為が、泊瀬部から川島に対してのものであることが「夜床も荒るらむ」からの必然の帰結として、「そこ故に」の連接に示されるからである。いるべき人がいない、その状況のなかで慰められないのは当然残された者である。こうした主語の欠落は、泊瀬部を「孀の命」と提示し、夫婦の機微に触れて「身に副え寝ねば」の主語（「あなたが／皇子様が」）を示さない前段と同様である。前段において主語が示されないことについて、橋本は「なくてもそのまま通じた」からと指摘する。作中主体（忍坂部）にとつて自明であることはあえて示す必要がないとみるべきであろう。

ただし、川島を三人称と解すると、一首はより聞き手を意識したものとなる。その場合、主語等は明示された方がわかりやすくなる。二人称・三人称双方の可能性はあるものの、この点、二人称で直接川島にうたいかけたものとみる方が理にかなっているように思われる。本文長歌の結句に、唯一作中主体の断定的な感慨として「逢はぬ君故」の句が据えられ、「君」が明示されたのも、川島に直接うたいかけたものとみると、作中主体（忍坂部）自身の川島への哀惜の念を強調したものと受けて止めることができる。

結句の「逢はぬ君故」は、集中にほかに一例あり、類例として「逢はぬ妹故」が一例、「逢はぬ兄故に」が三例見られる。

1 はしきやし逢はぬ君故 いたづらにこの川の瀬に玉裳濡らしつ (11・二七〇五、寄物陳思)

2 行けど行けど逢はぬ妹故 ひさかたの天露霜に濡れにけるかも (11・二三九五、正述心緒・人麻呂歌集)

3 春日を 春日の山の 高座たかくらの 三笠の山に 朝去らず 雲居たなびき かは鳥の 間なくしば鳴く 雲居なす 心いさよひ その鳥の 片恋のみに 昼はも

日のことごと 夜はも 夜のことごと 立ちて居て 思ひそ我がする 逢はぬ兄故に (3・三七二、雑歌)

4 はしきやし逢はぬ兄故に いたづらに宇治川の瀬に裳裾濡らしつ (11・二四二九、寄物陳思・人麻呂歌集)

5 紀伊の海の名高の浦に寄する波 音高きかも 逢はぬ兄故に (11・二七三〇、寄物陳思)

3は、卷三所収の山部赤人の「春日野に登りて作る歌」、他の四例は卷十一の歌で、二例が人麻呂歌集所出の歌である。赤人の歌は雑歌部に収められるが、片思いの恋情を内容とする。他も恋歌であり、挽歌での使用は当該歌のみということになる。たぶん泊瀬部の夫君への恋慕の情にかかわって用いられたと考えられるが、用例は「君」なり「妹（兄）」なりへの恋情を背景に、逢えず結ばれないのに噂だけが高いこと(5)、逢えないために、①むなしく裳を濡らしたこと(1・4)、②我が身が露に濡れたこと(2)、③いつそう恋情が募ること(3)を内容とする。当該の類型句を通して示されるのは、逢えないがゆえの嘆き、逢えないがゆえの恋情といえる。

当該の長歌にもこうした感慨がかかわるとみられるが、注

意されるのは、右の例がいずれも自身について嘆いた歌であるのに対して、この場合の「逢はぬ君故」は作中主体が皇女について述べたものであるという点である。他者が皇女について、「逢えない君なのに、むなしく旅寝をなさるのか」と言うのであるから、この表現は作中主体の忍坂部が泊瀬部の行為を思いやり嘆いたことになる。それは皇女をいたわしく思っていることであり、皇女への同情、いたわりといつてよいものである。川島にうたいかけたものとみると、川島に対してあなたの「妻の君」は、逢えないあなたなのにどうして、といふかり嘆いたことになる。

一首全体においては、末部のこの句を通して、皇女の逢会への希求はかなわぬ思いとして位置づけられ、同時に、そのことをみずからのこととして受け止め、悲嘆する作中主体の姿が定位されるのだといえよう。「逢はぬ君故」は、これ以前、川島や泊瀬部にかかわって推量や疑問の形で示されてきた感慨とは異なり、前記したように唯一断定的に示された作中主体自身の感慨である。一句には川島の死を自身受け止めての深い嘆きと追悼の念とが込められていると解される。

長歌において人麻呂は、忍坂部を作中主体に据え、忍坂部が川島にうたいかける形で、夫君を追慕してやまない泊瀬部の姿を、忍坂部のいたわりの眼差しの中に描出するという方法を取りつつ、忍坂部の哀惜の情をも添えて追悼の念を示したのである。橋本論以来指摘されるように、当該歌は忍坂部の依頼を受けて、川島の追悼の場に供すべく制作されたものであろう。

三、反歌の性格

次にこうした長歌に対して、反歌がどのように位置づけられるのか、その点にかかわって反歌の内容と性格を整理したい。

反歌の上二句は「しきたへの袖交へし君」と、夫婦の機微に触れて皇子を提示する。長歌前段と関連する表現とみてよいが、この二句をどう解するかは、主格の人称理解にかかわって問題を含んでいる。

長歌同様作中主体を第三者とみれば、上二句は泊瀬部を主格に、三人称で「皇女様が袖を交わし合った君」とも、二人

称で「あなたが袖を交わし合った君」とも解釈できる。また、第三者を作中主体と見ず、泊瀬部自身を作中主体として、一人称で「私が袖を交わし合った君」の解釈も可能である。古注以来いずれの解釈もあるが、諸注釈を一瞥すると、武田祐吉の「皇女に代わつて詠んでいる」(『全註釈』)、斎藤茂吉の「皇女の御心になつて人麿の作つた歌と看ていい」(『柿本人麿評釈篇卷之上(人麿短歌評釈)』)、土屋文明の「作者人麿が、皇女の位置に自らを置いて、その感動をのべて居る作法であらう。第三者として傍観するゆき方ではない。結句の如きは、殊に、その点がはつきり感ずることが出来る」(『万葉集私注』)、沢瀉久孝の「長歌では第三者としての作になつてゐるが、反歌では皇女の位置に立つての作の如くなつてゐる」(『万葉集注釈』)といった見解が続くなかで、皇女自身の感慨とする理解が通説的な位置を占めて現在に至つてゐるように思われる。

上二句の理解にかかわつて、集中の「かふ」の用語例に注目すると、「袖交ふ」の例が当該歌のほかに二例見られる。また「袖さし交へて」の例が二例見られる。

A 天の川夜船を漕ぎて明けぬとも 逢はむと思ふ夜袖交

へずあらむ (10・二〇二〇、秋雑歌)

B あらたまの年は果つれど しきたへの袖交へし児を忘れて思へや (11・二四一〇、正述心緒)

C 白たへの 袖さし交へて なびき寝る 我が黒髪の
ま白髪に なりなむ極み 新た代に 共にあらむと
玉の緒の 絶えじい妹と 結びてし 言は果たさず
思へりし 心は遂げず…… (3・四八一、挽歌)

D ねもころに 物を思へば 言はむすべ せむすべもな

し 妹と我と 手携はりて 朝には 庭に出で立ち

夕には 床打ち払ひ 白たへの 袖さし交へて さ寝

し夜や 常にありける…… (8・一六二九、秋相聞)

Aは巻十秋雑歌の七夕の歌で、彥星の立場でのもの。船を漕いで夜が明けたとしても、今宵織女と袖を交わさずにいられようかの意。またBは、巻十一の正述心緒の一首で、この一年は暮れたけれども、袖を交わし寝たあの子を忘れることであろうかの意である。いずれも「袖交ふ」は自身の行為としてうたわれる。またC・Dもこの点は同様であり、Cは巻三の高橋朝臣の亡妻挽歌、Dは家持の坂上大嬢への贈歌で、

妻との共寝を「白たへの袖さし交へて」と表現する。集中にはこのほか、「白たへの袖解き交へて」（4・五一〇）、「しきたへの衣手交へて」（3・五四六）、「遠妻と手枕交へて」（10・二〇二二）の例があるが、いずれも自身の行為であることに変わりはない。

これらの例をもとにすると、当該反歌の作中主体は泊瀬部で、「しきたへの袖交へし君」の「袖交へし」も、結句の「まとも逢はめやも」も泊瀬部を主格としての一人称でのものと理解される。「玉垂の越智野過ぎゆく」は、川島が越智野から幽界へと過ぎ去ることを意味したものと考えられるから、一首は、

（私が）袖を交わして共寝したあなたが、越智野を過ぎ去って行く。（私は）再び逢えるだろうか（もはや逢えない）。

と解釈できよう。上二句には生前を回想しての皇子への〈追慕〉が、三・四句には皇子の他界という〈現実〉が、全体を統合する結句には現実を受け止めての〈嘆き〉が示されている。皇子への追慕に根ざしての嘆き、これが一首の主題である。

一首は作中主体を皇女に据えての、妻の泊瀬部から川島にうたいかけられた挽歌と理解できる。

長反歌に込められた感慨を整理すると、長歌は、泊瀬部の嘆きを夫君追慕の切なる思いとしてとらえ、夫君との再会がかなわない皇女に深い同情といたわりを示した近親の忍坂部の感慨、反歌は、夫君と生前ともに過ごした日々を回想しつつ、越智野から遠く去りゆく夫君に限りない哀惜の念を示した泊瀬部の感慨ということになる。反歌は長歌の「旅寝かもある」の疑問に対応しての、泊瀬部の感慨の吐露となっている。そのありようは、長歌に対して反歌が追和の形を成し、いかにもその共鳴のなかで、越智野から遠く離れていく川島を哀惜するような趣になっている。

本文の長反歌は以上の通りだが、当該歌には長歌・反歌とも異伝が伝わる。双方の関係については伊藤論に詳しいが、本稿なりに整理すると、長歌には「荒るらむ」に対して「荒れなむ」とあり、「逢ふやと思ひて」に対して「君も逢ふやと」とある。「荒れなむ」の場合は未来の推量となるから、まだ荒れていないことになり、皇子に対する意識を斟酌すると、相

対的に皇子の不在への意識が弱いことになる。また、「君も逢ふやと」は、皇子が越智野で皇女と出会うかと、の意であるが、「君」を明示する分、皇子への求心性が強くなる。これらの異伝が一連のものならば、

……夜床も荒れなむ　そこ故に　慰めかねて　けだしく
も　君も逢ふやと……

の文脈となり、君の不在性が弱いなかで「君」の存在が強く押し出される結果となる。おのずと「そこ故に慰めかねて」に示される不在ゆえの追慕という内的連携は必然性に乏しいものとなる。これは居所よりも越智野に比重を置いたうたいぶりである。本文の「荒るらむ」の現在推量、「けだしも逢ふやと思ひて」による皇女の感慨の強調の方が明らかに内的連携は勝っており、長歌の異伝と本文との違いは（逢うこと）の内面化の度合いの相違としてとらえることができる。

一方、反歌には「越智野過ぎゆく」に対して「越智野に過ぎぬ」とある。「越智野に過ぎぬ」は、広く指摘されるように、皇子が越智野に隠れたことを言ったものであるから、その表現は直接的かつ現場的である。これに対して、「越智野過ぎゆく」

は、いままさに皇子が越智野から遠く離れていくというのであるから現在のである。反歌異伝の直接的、現場的という特色は、皇子との越智野での出会いを直接的に「君も逢ふやと」と表現した長歌異伝の表現とも通じる。また、「越智野過ぎゆく」の表現がもつ現在性は、長歌本文の、現在を時制とする「荒るらむ」の表現と呼応する。反歌における本文・異伝を比較すると、本文の方がやはり内面的であり、文芸性が高い。伊藤論は異伝歌が越智野で、そしてその後本文歌が追悼の場で披露されたと説くが、異伝・本文のこうした特色はその可能性が高いことを示唆するものといえよう。本文歌への変化は、越智野から離れて追悼の場を起点とした表現への改変と解され、推敲というよりも披露の場と機会を考慮しての改作という方がふさわしいであろう。

ただし、本文・異伝とも夫婦の機微に触れたその内容は、川島と泊瀬部の生前を身近に知る者でなければ同情と共感を寄せにくい質のものである。当該歌は、人麻呂の殯宮挽歌三作品（巻二の日並皇子・高市皇子・明日香皇女の各挽歌）のように、大宮人一般をも射程に収めるような外縁的広がりを

もっていない。むしろ遺族の泊瀬部、近親代表ともいふべき忍坂部を中心とした限られた人びとを享受者として制作されたものであろう。^(注20) 享受者が遺族・近親であれば、それに見合う形でそれらの人びとの嘆きをうたい、死者を慰霊する挽歌の方法が考えられてよいであろう。作中主体を異にし、長歌に追和する形で反歌が添えられるというあり方は、こうした享受者の問題と無関係ではないのではなからうか。^(注21)

四、長歌と反歌の関係

反歌は一般に長歌の反復・要約・補足を内容とすると説明される。^(注22) この点を基準にすると、長歌と作中主体を異にし、内容においても長歌の単なる反復や要約とは言えない当該反歌は異例に属することになる。この点にかかわっては、長歌についての理解は異なるが、長歌で追慕する人としてうたわれた泊瀬部の感慨が反歌に示されるという、そのあり方を問題とし、先行する同様の形式の存在を指摘して、それを踏まえたとする見解が伊藤博や曾田友紀子・上野理^(注23)にある。伊藤は七夕歌から、曾田・上野は葬歌からその形式を措定する。ま

た人麻呂作歌にかかわって、作歌主体の視点の変化に注目して長歌からの必然的な展開を説く見解が品田悦一にある。先行研究の観点を否定するものではないが、それらは反歌一般に還元しにくいのではなからうか。

当該歌において伝来する反歌が現行のごとくであるから、それに沿って長歌との関連を探り、長反歌をひとつのものとして理解するが、別の反歌が伝来すれば、やはりその反歌に即して理解が試みられることになろう。その点で、根本的に反歌とは何か、その機能から説かれるべきであろう。当該の長反歌の關係に、集中の同形式に比して、落差なり、違和感なりを感じるとすれば、こうした歌が反歌として伝わるところに、反歌の機能を知る手がかりが潜んでいるのではなからうか。

集中には、本文長歌に対して、あるいは本文長反歌に対して「或本」「或書」の反歌を記載する例が散見する。一例を高市皇子挽歌に取れば、本文長短歌（2・一九九、二〇〇・二〇二）に対して、「或書の反歌一首」（二〇二）があり、また日並皇子挽歌の第二反歌（一六九）に「或本、件の歌を以て後皇子

尊の殯宮の時の歌の反とせり」の注記があり、この一首もまた「後皇子尊」、高市皇子の挽歌の反歌として伝わる^(注21)ことが記される。

また卷十三には、本文長反歌で作歌主体の性別を異にする例もあり、それらについては編者の次のような注記が記される。

今案ふるに、この反歌は「君に逢はず」と謂へれば理に合はず、「妹に逢はず」と言ふべし。

(三二六〇の反歌三二六一左注)

今案ふるに、「妹によりては」と言ふべからず。まさに「君により」と謂ふべし。なにとならば、すなはち反歌に「君がまにまに」と云へればなり。

(三二八四左注)

どちらも性別にかかわって長反歌の歌詞の齟齬を指摘したものであり、前者は長歌を、後者は反歌を基準にしてその点を指摘する。こうした例については、歌の書記化の過程で長歌と反歌とが組み合わされたものという理解も可能であろう。仮にそうだとすると、そうした営為が可能になるのは、集中の異伝反歌の多さを合わせみると、反歌が長歌に関連して

制作されるとはいえ、そのあり方は多様かつ任意であったからであらう。^(注22)

卷十三の「問答」の部には次のような例も伝わる。

つぎねふ 山背道^{やましろぢ}を 他夫^{ひつづま}の 馬より行くに 己夫^{おのづま}し
徒歩^{かち}より行けば 見るごとに 音のみし泣かゆ そこ思
ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と 我が持てる
まそみ鏡に 蜻蛉^{あきづひれ}領巾 負ひ並め持ちて 馬買へ我が背

(三三一四)

反歌

泉川渡り瀬深み 我が背子が旅行き衣ひづちなむかも

(三三一五)

或本の反歌に曰く

まそ鏡持てれど我は駿^{うま}なし 君が徒歩よりなづみ行く見
れば

(三三一六)

馬買はば妹徒歩ならむ よしゑやし 石は踏むとも我は
二人行かむ

(三三一七)

右の四首

下級官人が宮の造営にかかわって往来するときの歌かとも

られている作である（伊藤博『万葉集釈注』、曾倉岑『万葉集全注』）。『釈注』は藤原京の造宮に、『全注』は恭仁京の造宮にかかわる歌かとする。長歌は妻の歌で、よその夫が馬で通うのに自分の夫が徒歩で行く苦勞に心を痛めて、母の形見の鏡に「蜻蛉領巾」を添えて「馬買へ我が背」と呼びかけたものである。一方、本文反歌は、旅先の夫を案じて、衣が「泉川」（木津川）の渡り瀬で濡れていないかと思ひやつたものである。『問答』に分類されつつも、本文長反歌が問答形式になっていないところに問題があるが、或本の反歌の方は、第一反歌が夫が徒歩で難渋しながら行くようすをみると、鏡を持っていても甲斐がないことを述べたもので、妻の立場での歌。これに対して、続く第二反歌は夫の立場の歌。初句に「馬買はば」とあり、長歌の「馬買へ我が背」に応じてのもので、馬を買えば「妹」が徒歩になってしまう、難儀でも二人で行こうと、長歌や第一反歌の妻の感慨に答えたかたちになっている。

卷十三編者は、或本に夫側の歌が伝わることに起因して、当該歌群を「右の四首」として「問答」に据えたと推測できると、この場合、問答形式は長歌と反歌との対応として伝わ

る。しかも一方の本文反歌は、長歌同様妻の立場での歌となっている。こうしたあり方からは、反歌がひとつではなく、多様かつ任意的なものであったことが窺える。

一般に、反歌は長歌と主体を等しくするものと解されている。その理解を前提とすると、この場合、長歌は妻の一人称による感慨、本文反歌も同じであるから、我々は作者は妻で、長反歌は行路での夫の苦勞を思ひやつた、主題を等しくする歌と解する。一方、異伝の長反歌については、第二反歌が夫の立場の歌になっていることを考慮して、長歌および第一反歌は作中主体を妻に据えて詠んだもの、また第二反歌は妻に答える歌として作中主体を夫に据えて詠んだものと解することになる。そうすると、作者は第三者で、それぞれの立場でその感慨を述べたものということになる。本稿が分析した当該の長反歌の關係である。

このように卷十三の右の本文・或本の長反歌は、同一の長歌をもとにするにもかかわらず、統一的に理解できず、個別に理解することになる。同じ長歌に複数の反歌群が成り立つということから帰納し得るのは、長歌は反歌が付随していて

も、基本的に長歌は長歌で独立しているということである。つまり、一首として成り立つ以上当然のことではあるが、長歌のみでその意図するところが示されているということである。

この点にかかわって注意されるのは、『万葉集』の長反歌形式の歌について、題詞にその歌数を記すとき、長歌に即して一首と数え、反歌が付帯する場合、「并短歌」と記すことを基本とする点である（巻二以降の基本形態）。反歌をも加えて総数で記すのは、巻三所収の伴家持の、

十六年甲申春二月、安積皇子の薨ずる時に、内舍人大伴宿柅家持が作る歌六首
(四七五題詞)

の例と、巻五所収の山上憶良の、

熊凝^{くまより}がためにその志を述ぶる歌に敬みて和する六首 并
せて序
(八八六題詞)

老いたる身に病を重ね、年を経て辛^{たしな}苦み、また児等を思

ふ歌七首 長一首短六首
(八九七題詞)

男子^{をのこ}の名を古日といふに恋ふる歌三首 長一首短二首

(九〇四題詞)

の例で、全体四例に過ぎない。『万葉集』の編者が、このように長歌を基本に歌数を数えるのは、長歌の独立性、完結性に根ざしているものであろう。^(注26)

同一の長歌に複数の反歌群が成り立つということにかかわって次に言えることは、反歌は作者が長歌の内容を踏まえて、それを補完すべく任意に添えるものということである。長歌は一首で独立した完結性をもつから、補完はその内容の享受にかかわって享受者を前提とすると考えるべきであろう。

右の「問答」の例の場合、享受者は特定できないが、本文反歌は妻の歌、一方、或本の第一反歌は妻の、第二反歌は夫の歌である。妻の立場の反歌はともに長歌に関連してのものであることが明らかであるが、歌詞・内容は相違する。また或本の第二反歌の夫の歌は、歌詞の対応から長歌を踏まえたものであることが明かで、妻の立場の長歌を受けて、さらに妻の立場の歌と夫の立場の歌を並べて「馬買へ我が背」に示される長歌の感慨を深めたものと考えられる。本文・或本ともそれぞれに長歌を受けて、その内容を深めたもので、反歌は長歌を補完すべく添えられたものと判断される。

また、先に検討した献呈挽歌を例に取ると、人麻呂は長歌において、忍坂部の目を通して夫君を追慕する泊瀬部の姿を描出した。長歌は忍坂部の立場での歌として独立した存在である。そして長歌には当該の反歌が添えられた。ただし、人麻呂がどのような反歌を添えるかは任意であり、現行以外の反歌も可能だったはずである。

「またも逢はめやも」を本稿は泊瀬部自身の嘆きと解するが、長歌には、泊瀬部の追慕の感慨が「けだしくも逢ふやと思ひて」と述べられ、越智野での旅寝がその期待もむなしく「旅寝かもある逢はぬ君故」と、疑問的詠嘆を伴って再会のかなわぬそれとして深い嘆きをもつてうたわれている。長歌の叙情・主題を深めるべく、その補完として反歌が添えられるというとき、考慮されるのは前記したように享受者であろう。当該歌は川島の追悼に際して詠じられたものと考えられるが、参会者（おそらく近親者を中心とした）のなかでその享受の中心に位置するのは、歌が献呈された泊瀬部その人である。追悼の場においては、遺族の嘆きは基本的に参会者の心でもある。長歌の「旅寝かもある逢はぬ君故」という作中主体の

嘆きを受け止めるのは泊瀬部であり、任意的な反歌において、長歌に和して、当事者である泊瀬部自身の嘆きが示されれば、それはおのずと残された者を代表しての感慨ともなる。それは〈嘆きの共有〉を促す。当該歌で泊瀬部を一人称とする反歌が添えられたのは、長歌に泊瀬部の追慕がうたわれたことにかかわって、川島薨去の悲しみを参会者の共有の嘆きにするという、人麻呂の意図に根ざしてのことであろう。反歌の結句の「またも逢はめやも」は「私はふたたび」の意でありつつ、追悼の場においては、「私たちはふたたび」の意ともなつて機能するのである。

では、こうした反歌のありようは、他の人麻呂の挽歌でも見出せるだろうか。献呈挽歌に先行する作品に注目すると、持統三年四月に薨去した日並皇子の挽歌がある。この挽歌の長歌も前後二段から成り、前段では日並の父の天武天皇を神話的存在として描出し、その絶対性が強調される。また後段では、その偉大な父を継ぐべき存在として日並を位置づけ、即位が待ち望まれていたにもかかわらず薨去したことを、飛鳥の西に位置する真弓の岡に設けられた殯宮への鎮座をうた

うことで示される。そして、これを受けて長歌は、

……朝言に 御言問はさず 日月の まねくなりぬる

そこ故に 皇子の宮人 行くへ知らずも 一に云ふ、さす
だけの 皇子の宮人 行くへ知らにす (2・一六七)

と、朝のことばもなく月日の経過したことを言い、そのため
に皇子の宮人たちが途方に暮れていることをうたう。長歌は
これをもって収束するから、長歌では皇子の薨去の悲しみが
宮人の嘆きを通して象徴的にとらえられているということに
なる。

この長歌を受けて、人麻呂が添えた反歌は次の二首である。

ひさかたの天見ることく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく

惜しも (二六八)

あかねさす日は照らせれど ぬばたまの夜渡る月の隠ら

く惜しも (二六九)

一首目は、天を見るように仰ぎ見た皇子の宮殿である島の
宮が荒廃することを惜しんだもの。「荒れまく惜しも」の「荒
る」は「夜床も荒るらむ」の「荒る」と同じであり、いるべ
き人のいない状態、その不在に起因しての荒廃の状態をさす。

したがって皇子の薨去によって島の宮が荒廃することを嘆い
たものである。また二首目は、「月」に薨去した皇子をよそえ
て、月の隠れるのが惜しいとうたうことで皇子の薨去を嘆い
たものである。これらの反歌も、先の理解にしたがえば、人
麻呂によって任意に添えられたものということになる。

問題はその任意性であるが、旧稿で触れたように、これら
の歌と同様の感慨を述べた歌が皇子に仕えていた舍人たちの
働傷歌群にあり、この点を考えるうえで注目される。

I 高光る我が日の皇子の万代に国知らさまし島の宮はも

(2・一七一)

II 高光る我が日の皇子のいましせば 島の御門は荒れざ

らましを (二七三)

III 天地と共に終へむと思ひつつ 仕へ奉りし心違ひぬ

(二七五)

Iでは、島の宮を皇子が万代に国を治めるはずだった宮と
うたい、IIでは皇子が健在であつたならば、島の宮が荒廃す
ることはなかつたとうたう。またIIIでは、「天地と共に終へむ」、
その覚悟で皇子に仕えていたのにその思いが果たせなくなつ

たとうたう。反歌二首と比較すると、Ⅱは第一反歌の裏返しで、どちらも皇子の薨去、不在への嘆きをうたったものである。またⅠは、即位への期待がなくなかったことをうたったものであり、第二反歌に通じる感慨である。皇子と生涯共にという、Ⅲに示された思いが舍人ら宮人たちの共通の思いであり、それが反歌の感慨を生むのだと理解できる。

皇子に仕えた宮人たちは遺族の外縁に位置し、またその外側には大宮人一般が位置する。その点で、宮人たちの感慨は、皇子に身近に仕え、接した者の感慨として遺族のそれに通じ、また主君に対する臣下の感慨としてその外縁に位置する大宮人のそれにも通じるという二重性を有している。宮人の思いをうたうことは、遺族の心を慰めると同時に、皇子を失った悲しみを大宮人共通の思いとして全円的に提示することにもなったのである。反歌二首はこの観点から、長歌の宮人をよるどころに「そこ故に皇子の宮人行くへ知らずも」を受けて添えられたものであろう。反歌は宮人の思いを具体的に示したものと見える。この作品でも長歌の享受を前提に、提示された追悼の念を参会者が共有し、深めるべく、宮人の感慨に

注目して反歌が添えられたのだといえよう。

こうしたありようを踏まえると、献呈挽歌・日並皇子挽歌は、双方趣を異にするとはいえ通底するものがある。それは長歌を補完すべく、その享受の場や享受者を前提にして反歌が付されるということである。献呈挽歌で泊瀬部自身の感慨を反歌としたのは、この作品における人麻呂の方法と判断される。反歌は本来、長歌の単なる反復や要約を目的としたものではない。長歌の叙情や主題をその享受にかかわって深めるべく、その補完のために制作されたものとみるべきである。

結

本稿では人麻呂の長反歌形式にかかわって献呈挽歌を考察した。論議の絶えない作品であり、いまだ統一的な理解が得られているとはいえない作品である。本稿では、長歌では忍坂部皇子を、反歌では泊瀬部皇女を作中主体として、泊瀬部の追慕と嘆きを通して川島皇子の死を悼むという人麻呂の方法に根ざした作品であると分析した。

また長反歌で作中主体を異にする点にかかわって、長歌と

反歌の關係について検討し、長歌はそれのみで完結する性格のものであり、反歌は長歌の叙情や主題を深め、享受者が共有するために添えられるものであることを述べた。反歌は長歌の享受のためのものであるから作者に即して任意であり、個別的である。どのような反歌が添えられるかは、作歌の方法や長歌の主題、作者と享受者との關係などによつて決まることになる。また、その任意性にかかわつて、ときには時と場を変えて新たな反歌が添えられることもあり得たとみるべきである。この観点からすれば、長歌の十全な理解のために添えられる反歌は、作歌にかかわつての方法のひとつであり、反歌の側からその作品を評価する視点も用意されてよいことになる。万葉歌における反歌の添付は人麻呂以降顕著になる点に注意すると、とりわけ人麻呂作歌の分析・評価においては、かかる視点からの再検討も求められるところであらう。

もちろん反歌は作品により多様である。またそれ自体に變化の歴史が含まれてもいる。したがつて反歌を一律に論じることができない。ただし、万葉の後期を代表する家持の長反歌などは長歌の構成と歌句を踏まえて、長歌の内容を丹念に

反復、要約した例が多く見られる。反歌の機能を長歌の反復・要約に求める見解は、こうした傾向をも踏まえてのものだが、それは反歌の展開の歴史においての傾向であり、結果であるということも考慮する必要がある。

長歌の叙情を深めるべく、その補完のために制作された反歌が、補完的機能を失い、形式の踏襲という面に傾けば、おのずとそれは長歌の反復傾向を呈することになる。その傾向が助長されれば、長歌による叙情と短歌形式の反歌による叙情は均質なものとなるから、反歌を添える意味も希薄化する。それは長反歌形式の形骸化である。長歌の機能する機会が減少しその必要性が乏しくなれば、その傾向はいっそう顕著になり、長歌の衰退に呼応して叙情の表明は短歌のみで間になることになる。和歌（倭歌）が短歌形式に収斂する背景には、こうした反歌の機能の變化ということも深くかかわつていてと考えられる。

『万葉集』において卷二以降、長反歌形式について題詞に歌数を記す場合、基本的に長歌を主体に一首、二首と数え、反歌については「并短歌」と記されることも述べた。「并反歌」

と記されないのは、「并短歌」の注記が、反歌を長歌内容の単なる反復・要約と解し、長歌に並ぶ叙情形式とみる認識に基づいて、その認識段階で記されたものだからであろう。^(注28)ただし、一部例外はあるものの、長歌を主に数える認識は基本的に一貫している。本稿の観点から言えば、それは長歌の完結性、反歌の補完性の伝統に根ざしていることになる。

長反歌は本文・或本の別なく、それぞれ一回生起的なものである。長反歌を合わせみるべきことはいうまでもないが、長反歌形式については、反歌の機能に視点を据えて個々の作品を検証すべきことも今後の課題である。この点を確認して終わりとする。

注

- (1) 稲岡耕二「人麻呂の表現意図―川島挽歌と吉備津采女挽歌―」『文学・語学』第九三号、一九八二年六月。以下、稲岡論については同論文による。
- (2) 大野保「孀の命のたたなく柔膚」『萬葉』第二四号、一九五七年七月。
- (3) 阪下圭八「人麻呂挽歌の構造―「泊瀬部皇女献呈挽歌」をめ

- ぐって―」(東京経済大学 人文自然科学論集) 第一二号、一九六六年二月、『和歌史のなかの万葉集』笠間書院、二〇一二年七月。
- (4) 伊藤博「七夕歌の世界」『萬葉集の表現と方法上』塙書房、一九七五年十一月。以下、伊藤論については同論文による。
- (5) 宮田持江「万葉集卷二194番歌の一考察―「孀の命」について―」(高知女子大学 国文) 第二一号、一九八五年一〇月。
- (6) 拙稿「殯宮挽歌の文学史的位置」(柿本人麻呂の時代と表現) おうふう、二〇〇六年二月、初出二〇〇五年。
- (7) 橋本達雄「献呈挽歌―献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌の場合―」『万葉宮廷歌人の研究』笠間書院、一九七五年二月、初出一九六七年。橋本論は以下同論文による。
- (8) 身崎壽「献呈挽歌」(人麻呂の方法 時間・空間・語り手) 北海道大学図書刊行会、二〇〇五年一月。身崎にはこれ以前、「柿本人麻呂献呈挽歌」(伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ第二集』有斐閣、一九七七年十二月)、『宮廷挽歌の世界―古代王権と万葉和歌―』塙書房、一九九四年九月)がある。以下、特に注記しない限り、身崎論は二〇〇五論文による。
- (9) 曾田友紀子「河島皇子挽歌の手法―葬歌との関係から―」(「古代研究」第一八号、一九八六年三月)。曾田論については以下同論文による。
- (10) 卷十三の三二九五では「如何なるや人の子ゆゑぞ」、三三〇

九では「汝はいかに思ふや」とある。

- (11) 倉持しのぶ「人麻呂「献呈挽歌」試論」(『美夫君志』第四九号、一九九四年一〇月)、村田右富実「献呈挽歌」(『柿本人麻呂と和歌史』和泉書院、二〇〇四年一月、初出一九九五年)、駒井陽子「柿本人麻呂の「献呈挽歌」試論」(『叙説』第二三号、一九九六年一二月)など。

- (12) 本稿は当該長歌に緊密な構造をみるが、その点については後述参照。

- (13) 岡内弘子「人麻呂「献呈挽歌」の論」(『和歌文学研究』第四八号、一九八四年三月)

- (14) 身崎壽 注8 掲出、二〇〇五論文に倣って、本稿もこの語句を用いる。

- (15) 身崎壽 注8 掲出、一九七七論文。

- (16) 土井清民「河島皇子挽歌」(山路平四郎・窪田章一郎編『柿本人麻呂』(古代の文学2) 早稲田大学出版部、一九七六年四月)

- (17) 山本健吉『柿本人麻呂』(新潮社、一九六二年六月)がこうした見方に立つ。

- (18) 品田悦一「人麻呂作品における主体の複眼的性格」(小島憲之監修『萬葉集研究 第十八集』塙書房、一九九一年五月)。品田論については以下同論文による。

- (19) 4は裳を濡らしたというものだが、「逢はぬ児」の表現から

は男の歌と考えられる。この点、矛盾があるが、1の類歌としてそのまま扱う。

- (20) 橋本論(注7)が「殯宮の時の作品よりも、もっと私的な場で発表されたもの」として以来、小規模な追悼の場を想定する論が多い。

- (21) 当該歌について川島を直接の対象とみることについては、従来積極的な評価が得られていない。前段を忍坂部から川島にうたいかけられたものとする橋本論でも、当該歌に「河島を悼む心は全くない」という。しかし、挽歌は死者と生者にまたがる悼みの世界である。川島が意識されないということはあり得まい。泊瀬部の追慕や嘆きをうたいかけることが川島の慰霊となり、泊瀬部・忍坂部がこうした内容の挽歌を聞くことがみずからの心の慰めともなるのだと考える。

- (22) 五十嵐力「国歌の胎生及び発達」(早稲田大学出版部、一九二四年八月)など。

- (23) 上野理「河島皇子葬歌―葬歌の生成と消滅―」(『人麻呂の作歌活動』汲古書院、二〇〇〇年三月、初出一九八九年)

- (24) 高市皇子挽歌の、こうした複数の反歌については、拙稿「高市皇子挽歌の反歌」(『柿本人麻呂の時代と表現』おうふう、二〇〇六年二月、初出二〇〇四年) 参照。

- (25) 反歌の多様性を指摘する先行研究に、吉井巖「反歌攷序説」(『萬葉集への視覚』和泉書院、一九九〇年一〇月、初出一九

五八年）がある。

(26) 人麻呂以後「長歌に反歌を添えるのが通例になった」ことにより、「長歌の意味も拡大され、反歌を含めて長歌と考えるようになった」(『日本古典文学大辞典』「反歌」(岡部政裕)とする見方もあるが、「反歌を含めて」というのであれば「并短歌」とは記されまい。長歌に対して反歌が任意に添えられる、そのあり方が問題だと考える。

(27) 拙稿「殯宮挽歌の成立とその方法」(『柿本人麻呂の時代と表現』おうふう、二〇〇六年二月、初出二〇〇二年)

(28) 先に示した、題詞に反歌をも加えて長反歌の数を総数で記す例を見ると、山上憶良の関係歌が多い。また憶良の「好去好来歌一首来歌」(5・八九四〜八九六)の題詞には、「好去好来歌一首反歌二首」とあり、小書きの注記として「反歌二首」と記される。こうした反歌注記はほかに例がない。これらの例は、憶良が反歌にきわめて自覚的な歌人だったことを示している。

*本稿は二〇一二年度国内特別研究の研究成果の一部である。